

地域、そして北



演出家・映像プロデューサー

守分 寿男

かつて、ロシア極東のウラジオストクで日本海に向かって立ったとき、奇妙な感覚に襲われた。

この海の南に新潟、東に北海道があるのだと、地図を頭において納得したわけだが、そのとき、日本の地図がふいに上下を反転させ、私が立つウラジオストクに向けて身を反らすように、南を上うに浮かんでいる。

そこから見える日本はひどく新鮮だった。

ロシアがまだソ連と呼ばれ、その地にやっと外国人が入れるようになったばかりのころ、北を結ぶテレビ局との連携に訪れたときのことである。

古いその街の建物は、小樽の街の石造りの建物と驚くほどに似通っていて、ふたつの地域の昔の交流を無言のうちに物語っているようであった。

それよりも少し前、やはり北の風土の特性を探りながら北海道とアラスカを舞台に2時間のドラマを創ったことがある。アラスカでのロケを終えて、その地の俳優やスタッフと別れるときに、「あたたかい南の北海道には、一度は行ってみたい」と皆から口々に言われた。

アンカレッジの空港で聞く“南の北海道”という言葉は、確かに、遙かな南方の海に浮かぶ島をイメージさせて説得力があった。

立つ位置によって、ものの見えかたが違う。

映像論の基本である。

ことは実際に見えるものに限らない、例えば、

北海道からみる（判断する）東京と、東京から見る北海道の間には、相互に大きなギャップが生まれる。昭和32年に、誕生したばかりのテレビにかかわって、以来数十年間にわたって北海道から多くの番組やドラマを送り出しながら、私がいつも感じ続けてきたのは、この、中央が求める北海道のイメージと、実際に北海道で生活しながら見つめている北海道のイメージとの違いの大きさであった。草創期、東京からのテレビは、「幸いにも台風は北に去りました」と伝え、ドラマでは、泣く泣く左遷されるサラリーマンの行く先は、決まったように北海道だった。

その頃、東京が求める北海道は、秘境、熊、そしてアイヌ民族の風習などであり、やがて、経済成長が進むと“取り残された地域、老人と子どもばかりの北”が、希望されるイメージとなる。オイルショックのあと、中央の過密、公害が問題になる頃からは、一転して“恵まれた豊かな大地、美しい自然”が羨ましがられ求められる。

膨大な量で奔流のように中央から流れ続ける画一的な情報に逆らって、北海道で生活する目がとらえた、その位置から伝えたいメッセージの発信は、やはり大変なことであった。

大変でも、それが最も大切、重要なことであったと私は思う。

150本近いテレビドラマの、その大半の制作、演出にかかわりながら、私がいつも考えてきたのは、北海道でなければ創れないドラマとはなにか、ということであった。

先輩に従って、巨大なカメラを石狩平野の泥炭地に据えて、米作りに挑む戦後開拓者の姿をとらえた昭和30年代の前半から、50年近い時間が過ぎた現在まで、自然環境も社会も、そして価値観も大きく変わっていった。

消えていくものと新しく生まれてくるもの。

蒸気機関車、農耕馬、蹄鉄屋さん、馬具屋さん、裸電球の灯る小さな雑貨屋さん、お産婆さん。見慣れていた懐かしいものがいつのまにか消えていき、その現場で生きている人たちの生活のなかから、多くの物語が生まれてきた。

また、新しく生まれたもの、たとえば、すみずみまで整備された道と車、ガソリンスタンド、飛行場、コンビニなどの風景も、劇の形象かたちを変えて

いった。

ドラマは人間を描くものである。

生きているのは、華やかな都会で、六本木や赤坂の風俗のなかを遊泳する人間ばかりではない。

北海道のさまざまな地域で、さまざまな問題をかかえながら生きる人たちの姿は感動的であった。

やがて、高度に発達した情報化の波のなかで、世界がちいさくなり身近なものになってきた。

日本のなかでは異質の、亜寒帯という風土を共有する海外各地との連携のなかから、いくつかの作品を通して、北ということを考えてみた。

ともすれば、南の東京だけに向かいがちな視点を、北に向けることで新しく見えてくるものがあるはずだと思ったからである。

その思いは、今も変わっていない。

今から十数年前、私はテレビのプロデューサーとして、「文化としての北」～北海道の地方性を問う、という大学の放送講座にかかわったことがある。自然科学、文化経済学、歴史学、文学、経済学、社会学、それぞれの領域からアプローチして、北海道に固有の文化はあるのか、あるとすればその特性とはどのようなものかを、45分番組、13本のシリーズで探ろうとした。構成を前にした、領域の異なる講師の方たちとの真剣な議論のなかで浮かんできたのが「統一性と多様性」という言葉であった。

この言葉をキーワードにして、地方と中央、周辺と中心という関係を考えていった。北海道の文化特性の詳細はおくとして、そのとき、戦後という時間軸を通して際立って浮き上がってきたのは、中央（東京）からの、一方的ともいえる情報、経済、社会、生活の画一化の動きと、その結果がも

たらした地域の個性の喪失であった。

日本がバブル経済の最盛期のときである。

その頃、私はある学会の機関紙に次のように記している。

「効率本意の“量”を中心とした経済からこぼれ落ちてきたもの、それが“文化”というものではないのか。極端な一極集中、画一的な価値観の横行とそれがもたらす歪み。そんな現状に対する、多様な地域、人間、個の側からの新しい価値観への問い直しは今こそ必要ではないか」

十数年以上が過ぎた今、その思いは一層強くなっている。

一次産業崩壊後の廃墟にかわって、バブル崩壊後の地方では、中央に踊らされたテーマパークの跡が無残な姿をさらしている。

世紀が改まった2001年の9月11日。

衝撃的なテロの映像が同時刻に世界を襲った。

その日から世界は変わったといわれている。

ひとつは、世界を限りなく単純化して、敵か味方か、善か悪かという二元論で裁断してしまったこと、さらには、冷戦構造後の急速なグローバル化に対する問い直しを迫られたことだという。

いずれにしても、突きつけられた問いに対する答えは容易ではないにちがいない。

ただ、あのテロの映像が問いかけているのは、グローバルな地球規模の視点とあわせて、多様な地域の価値観を尊重していく姿勢であり、その必要性、重要性ではないか、と思ったりする。

それは、新しい世紀にむけて、北海道が北海道を主張しつづけていくこと、そのことの重要性にびたりと重なるのではないか。

今、強くそう思う。

■プロフィール■

守分 寿男（もりわけ としを）／演出家、映像プロデューサー

1934年大分県生まれ。'43年北海道に移り、'57年小樽商科大学を卒業後、テレビの開局をむかえた北海道放送（HBC）に入社。以後、テレビ番組の制作にたずさわり、「わかれ」「ばんえい」「うちのホンカン」「幻の町」「あかねの空」「遠い絵本（アラスカロケ）」「林檎の木の下で（日中合作）」などのドラマを演出したほか、東芝日曜劇場のプロデューサー、「いかを釣る少年」など多数のドキュメンタリーの構成・演出を担当し、芸術祭などで多くの賞を受賞。その後報道制作局長、社長室長、ラジオ局長を経て常務取締役となり'97年退任。

現在は文化経済学会（日本）理事、大学評価・学位授与機構人文学系教育評価専門委員会委員、札幌国際大学非常勤講師（映像文化論ほか）などを務める。来春、劇団民藝の演出を予定。